

岡先生とおはなしえほん

岡 政先生を悼む

後 藤 千 枝

去る三月二十一日、雨降りの日でした。

このお話えほんを岡先生に見ていただいたそのときのおことばのはしはしを思い出しながら、私の心に残っていることを記させていただきます。と思います。

岡先生は、二日程前に、植木の刈りこみをされて身体中が痛く、ベッドでお休みでした。でも、このえほんはベッドに起きてみせていただきたいとおっしゃって、長い時間をかけ、やっとお坐りになり、押しただくように話の内容や絵をみてくださって、四歳児なりの着想や表現の動きを、涙ながらによるこんでくださいました。

ひい孫さん（あやちゃん・三歳）の絵も若いおばあちゃんが持つてこられ、いっしょにみせていただいたりして、幼児期の成長についてつきることなくお話がはずみ、聞かせていただいたり聞いているだけだったりしますと、幼稚園教師の生き甲斐やよろこ

びを味わい、自分のほこりにすばらしい満足感をもったひとときでした。

四月になったら、出石幼稚園に遊びに行かせていただきますからと申され、その日を楽しみに……。先生！もう木などせんていしてはいけませんよ。足腰たてなくなりますよ」きびしいことばを後に、そして、先生によるこんでいただいたよろこびにひたりながら帰宅いたしました。

この日、このときが永遠のお別れになるうとは、夢にも考えられないことでした。美しいお写真をみておりますと、優しいおことばで、暖かい声で話しかけてくださるようで、おなくなりになられたのではない、きっと生きていらっしゃるかもと思われてなりません。

お話えほんについて「このような絵本づくりは、市内の先生たちだけでなく、全国の先生たちに知らせてあげねば惜しい。ちよ

うど幼児の教育から原稿を頼まれているので、これを紹介して書かせていただく」とおっしゃって、このえほん作成での感想や苦勞したことなど書き出してちょうだい……と申されました。

このえほんの内容を確かめるかのように、ひとりごとのようでもあり、また、私への再確認と、課題を与えられるようにも思われて、御年九十歳だったとは考えられない才知と、暖かいおかあ様のような慈愛につつまれたあのひとときを思いかえし、感謝と、別離と、果てしない教育愛をかみしめる毎日でございます。

先生のおことばのはしはし！

「幼児が直接生活していればこそ、このお話ができ、幼児をたいせつにしている教師の暖かい心があればこそ、学級でのお話かえほんに作られ、またひとりひとりにまで与えてやる事ができたのでしよう」

「ひとりひとりに与えられ、家庭へ持ち帰ってからは、親の指導にもなり、幼児をみなおして、豊かな生活へつながっていくでしょう」

* * * * *

おはなしえほんの内容について

ふじがなる牧場へ園外保育（虫とり）に出かけ、虫との生活か

らその過程で、またむすびで、例年のようにお話づくりをしておりました。虫とり生活の中で、出石幼稚園独特の味わいのようなものが出てくるのではなからうかと、ひそかに期待して、いました。身近な生活（交通戦争の環境とか、当時の工事の現場、自分の心の中のものなど）が、虫の心の動きとなっておりました。四歳児の着想はきびしいものとすばらしい想像が表われているのに、おどろき、このような芽を表現させてくださった組の先生方に頭をさがる気持ちでいっぱいでした。

ひとりひとり各自で絵をかくてお話しえほんにする経験は、今までもしており、また、クラスで紙芝居的なお話づくりはしていましたが、一冊のえほんにまとめ、ひとりひとりに与え帰してやりましたのは、はじめてでした。

装丁について

印象深かった場面を最初、クレパスで描いておりましたので、それを教師がファックスへかけるため、マジックで写しなおしたり、大きい表現を縮めたり、体型にまとめるのに苦勞しました。

幼児の絵には動きがあることを、今さらのように理解することができ、なんともなんとも描きなおし、楽しんだ気持ちで描いて、やっと少しでも幼児の線に似たような動きになったと、ひとりで満足いたしました。（岡山市立出石幼稚園）

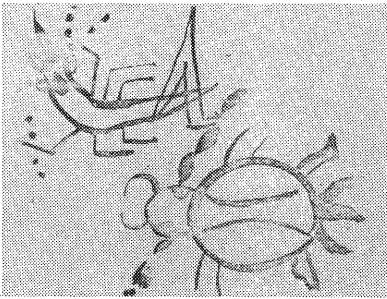
おはなしえほん

こおろぎとばった

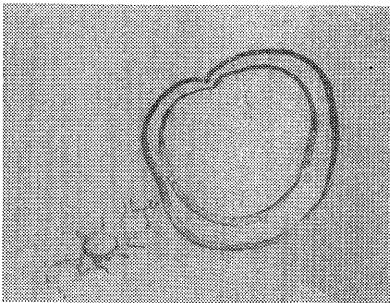
つぎたした絵などで、紙芝居の
ように表現され、大きく描いて
いた。それを縮少し、墨絵にか
いてみた。

4歳児・昭和49年10月制作

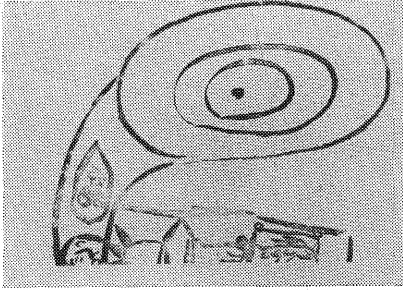
岡山市立出石幼稚園



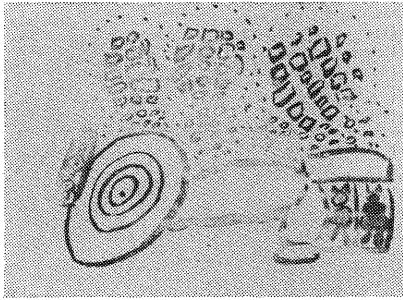
ようちえんへ
あそびにきていた
こおろぎとばったは
おやまへかえりたくて
なきました。



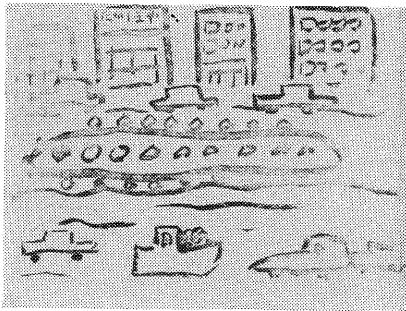
ようちえんのそとは
くるまがはしっていて
あぶないから
ちかをとおって
かえることにしました。



あなをみつめて
 はいって いきました。
 とちゅうに おおきな
 いしが ありました。
 もぐらさんが いしを
 のけて くれました。



だんだん あなへ
 もぐって いくと
 ふたつ あなが ありました。
 ひとつのあなに あかおにと
 あおおにがいて
 びっくりしました。
 もうひとつには ダイヤモンド
 が ありました。 おみやげに
 もらって かえりました。



あなのなかから そとへ
 のぞくと おかやまえきが
 みえました。 しんかんせんも
 はしっていました。
 たかしまやも みえました。
 トラックが はしってきたので
 のせてもらって
 おやまへ かえりました。

心の芽

後藤 千枝

自分自身も 知らない

教師も 知らない 心の芽

あの子 この子 それぞれに

いつの間にか どこかで

染めわけられていく 心の芽

人物 自然とのふれあいで

いつの間にかどこかで

形つくられていく 心の芽

あの子 この子 それぞれに

吹雪にもたえ

しっかりとして 伸びよう 心の芽

教師は みなおそう

たいせつに きびしく (おはなしえほん より)

岡先生のこれまでの歩み

岡先生は、明治二十年岡山に生まれ、四十年四月、東京女子高等師範学校(現、お茶の水女子大学)保育実習科に入学し、翌四

十一年三月卒業、同四月、岡山女子師範学校(現、岡山大学教育学部)附属幼稚園へ主任保育として赴任されました。

当時は一般に、恩物中心の形式的な保育、子どもに知識を与えるという保育中心の保育でした。それに対し、先生は、子どもの自発性、子どもの生活を中心にした保育をめざされました。そして、赴任するとさっそく、その実践にとりかかりました。まず、子どもに知識を教えるための教師用黒板を、いわば、大きな遊具として子どもが自由に使えるようにしました(明治四十一年)。教卓に向かって並んでいた(今日の小学校のような)ふたり机を、グループ活動用に配置がえしました(四十二年)。もちろん教卓もとり払いました。また、朝の集いや、鐘の合図をなくして(四十四年)、時間にとられない保育を求められました。恩物も、四十二、三年ごろから、子どもの遊具として自由に使わせました。

このように、子どもの自由な活動、自発性、子どもの生活を中心にして、外からの形式的な束縛をなくそうと、次々と実践に移されたのでした。時間に縛られない保育、場所に縛られない保育(組を廃し、子どもに全園を開放しました)、子どもの生活中心の保育に向かって、お若い情熱で体当たりされたのでした。

(幼児の教育 72巻8号 P 32)

松川由紀子「岡政先生会見記」より